

一は伊勢の大神宮さん 二は日光東照宮 三は讃岐の金比羅さん
四は信濃の善光寺 五は出雲の大社 六つ向こうのお地蔵さん
七つ奈良の南円堂 八つ大和の八幡さん 九は熊野の権現さん
十はところの氏神さん (奈良のわらべうたから)

「おかげさんで」とか、言いますね。「いい天気ですね」「おかげさんで」——「給料が上がりましたね」「おかげさんで」——「消費税も上がりましたね」「おかげさんで」……とは言わないでしょうけど、この「おかげさん」はお伊勢参りのスローガン、「おかげさまで生かされている」ということなのでしょう。

生きていることに感謝するために、一生に一度はお伊勢参りをしなければなるまい、そう言って江戸時代の庶民を誘ったのは伊勢神宮の御師たち。しかしこの「おかげさまで——」は、古代からある素朴な日本人の原風景、信仰心として、現在の私たちにも受け継がれているのです。

昔も今も人々は旅をする。旅は異郷の神や人々に出会うこと。江戸時代には各地の名所図会や街道の案内書が出版され、伊勢参りや西国巡礼が大流行した。

しかし当時は封建時代で、誰もが旅が出来たわけではない。女性や奉公人や貧しい人々にはお伊勢参りは許されなかった。彼らが突然家や奉公先を抜け出して、着のみ着のまま、路銀も持たず、お伊勢さんを目指したのが「おかげ参り」。

それは封建社会のしがらみに縛られた人々が、一生に一度の「おかげさまで生かされている」を体現するために行なった旅。だから彼らの尊い旅を助けるために、街道沿いの人々は食料や宿泊所を無償で提供したのです。「おかげ参り」は身分制度に縛られた時代の庶民の叫び、助けるものも助けられるものも、生きがたい世を生きるために、「おかげさんで」と叫んでいたのです。

大和高田は街道の町。「一は伊勢の大神宮さん——」。もうこんな素朴な旅の歌は歌われなくなりましたが、別の世界へ旅立ちたいと願う人の心は変わらない。だから「おかげさんで」と声掛けながら、歩きましょうか、高田の町を——。

